

## 中国政治理念の源泉

山室 三良

中国に於て政治的理念が確立したのは周の周公旦に於てであつた。その全容は幸にして書経の最も古い部分「五誥」に明らかである。今、書五誥を中心に中国政治理念が如何にして確立し行つたかを跡づけると共にその現代的意義についても一言ふれて見たい。

### 一

古来理想的な治を行つたと伝へられた夏殷周三代について、夏は今日尚依然として解明せられないが、殷は近約百年の考古学・歴史学の成果によつて略々その全容を明らかにして来た。周は多くの文献によつて古くからその姿が描かれている。殷は黄河下流に発祥して漸次上流に溯り、二百数十年の後、大行山脈を背にし洹水を前にした中原の一角に都を構え、滅亡に到るまで二百数十年間この地に栄えた。殷後半期の特色は、

一、文字を有し、儲蔵庫もあつた。（一九三六年春には完全な亀甲二百餘版を含む一万七千八百四片を儲蔵する記録

庫が発見され、管理者と思われる一体の人骨も一緒であつた。これは事故による埋没と推定される）。

二、比類を見ない程多種多様な祭祀、それに応ずる多様な語彙を有している（燕京學報第十九期陳夢家「古文辭中的商周祭祀」は祭祀の対象を五十七種に分類しているが、今日ではこれより遙かに多いことが判明している）。

三、巨大な櫛室をもつ墳墓が営まれ、殉死の他多数の犠牲が捧げられている（（死人を犠牲にする場合は、三百人も稀ではない））。

四、陶器の新しい発達があった。ことに白陶は象牙を思はせるやうな優れたものがある。

五、青銅器の鑄造技術を体得し、その技術は優れていた。銅に加へる錫はインゴットの形で遠くから運んだ。

六、青銅器は多種多様の祭器及び武器であった。

七、戦車が用いられていた。

八、狩猟を好み、動物に深い関心をもっていた。紋様も殆ど動物である。小鳥や象を飼育し、各地に広大な田獵地を有していた。

九、大理石、象牙、骨などの彫刻が優れていた。

十、その文化は世界文化ともいふべく、南方系、北方系の要素を共に含んでいた。

ことなどが挙げられる。その規模の大きかったことは、版図の広さ墳墓の大きさなどを別にしても、たとえば狩獵は武丁時代の記録に「虎一、鹿四十、玃百六十四（（玃はキツネともオオカミとも解される））、麋百五十九（（麋は鹿とも解される））」といふのがあり、「虎二」、

「鹿百六十二」<sup>(2)</sup>といふのもある。祭の捧げものも「犬五十、羊五十、豚五十」などいふ例の他「牛三百」或は「酒百杯、羊百、牛三百」などいふのがある。青銅器も此の類では最大の司母戊方鼎（重さ八百七十五キロ、南京博物院蔵）、牛頭方鼎・鹿頭方鼎（台北歴史博物館）など巨大豪華である。クリールは言ふ。<sup>(3)</sup>

商（（殷のこと））の青銅器祭器は疑も無く、世界の此の類の中でも最も優れたものである。それらは実に人類が嘗

て金属から創造したもので、時と處とを越えて最も美しいものである。

軍事的にも「婦好（名）の三千を登（登）し、口を呼伐せしめんか」と貞うた卜辞（貞）が示すやうに巨大であった。最後の帝王辛の人方遠征の如きは十ヶ月以上にわたる大遠征であった。<sup>(四)</sup>このやうな殷大帝国は幾多の「聖賢の君」とそれを助ける賢臣とによつて築かれて来たことは周初の記録である書経の所謂「五誥」に幾度か言及されている。建国者湯の名は、多士・多方・康誥・無逸・君奭等に出ているし、「殷の先哲王」、「商の耇成人」等の句もある。孟子は、「湯より武丁（武丁は殷の廿三代目、殷は卅一代までつづいた）に至る、聖賢の君六七作る」（公孫）といっているし、王を相けた賢者としての伊尹は書にも論語にも孟子（四十）にも見え、又保衡・伊陟・臣扈・巫咸・巫賢・甘盤等の名は書（爽）に見えてゐる。他に微子・微仲・比干・箕子・膠鬲等の賢人を孟子は挙げてゐる（公孫）。

周の文化の根源は殷にあった。周に初めて生れた古典を荷ふ文字は、先行した殷の文字なしには考えられない。銅器の製法、様式、紋様に至るまで全く殷のそれを踏襲した。周の銅器は文王以前には一つも見えないのに武王以後には藪のわき出した様な觀を呈していたと郭沫若はいふ（天の思想）。周は征服者としてよりもむしろ殷文化の継承者として自らを認め、謙虚に殷の文化に聞かうとした。宗教的儀礼（祭）も法も殷のそれを意識的に学び殷の先哲王を事毎に規範としてゐる。

茲の殷の罰、倫有るを師とせよ（これらの殷の法が正しい法則をもっているのを手本とせよ）（康誥）

罰蔽は殷の彝（にによる）（蔽は断の意）（康誥）

往いて敷ねく殷の先哲王に求め、用つて民を保父せよ。汝不に遠く商の耇成人を惟ひ、心に宅り訓を知れ、別ねく古先哲王に聞由するを求め、用つて民を康父せよ（康誥）

故任いてあまなく（數ニ偏、經義述聞四）殷の帝王にもとめ、それによつて民を保んじおさめよ、汝大いに遠く商の古い完成した人を選び、彼等の心を理解し、彼等の數  
へを知れあまなく（別ニ偏、經義述聞）古帝王に服き出ることを求め、それによつて民を興んじかつけれ。

我時其れ殷の先哲王の徳を惟ひ、用つて民を康父して求を作さん（康誥）

新しい都洛邑の完成に際しては殷の礼を挙げて神々を祭るべきことを述べている（洛誥）。以上あげた言葉はすべて周公のそれであるが、周公はひたすら殷の手本に則らうとしている。

## 二

殷が既に卅一代の王位を継承している中原の大帝国であるのに比べて、周は陝西省北部に発祥した殷周辺の未開部族の一つにしか過ぎない。祖先も僅かに三代を明らかにするのみである。

大王（古公亶父）——王季——文王——武王

詩大雅縣によれば周民が初めて生じたのは（陝西省北部の溪谷）沮水漆水のほとりであり未だ穴居であつた。

古公亶父、陶復陶穴して未だ家室有らず……古公亶父……西水の潁に率ひ、岐の下に至り、爰に姜女と、聿に來つて胥宇せり……

大王が梁山を越え岐山のふもと周原に移つたのは北方の蛮族に侵された結果であることが孟子に記されている（梁惠王下）。然しかかる事情の他にも新興の周が若い部族のヴァイタリティーから、中原へより便利なより広い豊かな土地に移つたといふ面もあつたであらう。魯頌閟宮には

后稷の孫、実（子）に維れ大王、岐の陽に居り、実に始めて商を剪む

とあつて、周原に移つて來た大王が始めて殷との關係を有つたことが語られている。周原は今日の西安の約八十

哩西の地といふ。大王はここで始めて都城らしいものを築きその様子が詩に見えている。大王の子の王季は中原の殷から摯仲氏の任を妻として迎へ、任は王季と共に徳を行ひ、その子文王に到つて周辺の諸部族が周に心を寄せるに到つた。

摯仲氏の任、彼の殷商より、来りて周に嫁ぐ、乃ち王季と、維れ徳をこれ行へり大任身れる有り、此の文王を生む、維れ此の文王、小心翼翼、昭らかに上帝に事へ、聿多福を来せり、厥の徳回はず以て方国を受く（大明）。この文王も亦殷から妃を迎へたが、それは殷の帝王帝乙（（最後から二））の妹であつた。このことは古代中国社会に於るよほどの大事件であつたと見えて「易」にも「帝乙歸妹」の句があり、同じ句が甲骨文にもある。詩にも文王嘉止、大邦に子有り、大邦に子有り、天の妹に俔らふ、文もてその祥を定め、親しく渭に迎ふ、舟を造べて梁と爲し、丕に其の光を顕はせり

とある。二代にわたつて中原の文化国家から妃を迎へたことによつて若い部族は大いに刺戟され、周のヴァイタリティーはめざましく開花して行つた。文王は百歳近い寿命を保つたが、晩年にはその勢力は天下の三分の二に及んだといふ。論語には、「天下を三分して其の二を有ち以て殷に服事す、周の徳、それ至徳と謂ふべきのみ」（泰伯）とある。孟子には、「且つ文王の徳、百年にして而して後崩ずるを以てすら、猶ほ未だ天下に治ねからず、武王・周公之に継ぎ、然る後大に行はる」（公孫丑上）とある。武王に至り初めて黄河を渡つて中原に進出し、殷の都朝歌の郊外牧野で戦つて大勝した。然し周は中原から見れば何といつても西夷（（西方の））であり、深く文王を敬した孟子も文王を西夷の人と言っている（（西夷の人なり））。殷の人人が周を田舎者と見ていたことは、周公が大誥の中で「反りて我が周邦を鄙にす」といったことでも分る。周は殷に克つたとはいへその大版図を統治する十

分な實力も経験も未だ有っていない。武王は紂の子武庚・禄父を殷の都あとと殷原住の地梁山とに封じて殷の祭祀を継がせ殷の人人を統治させると共に自分の弟管叔鮮を管（鄭州）に、もう一人の弟蔡叔鮮を蔡（河南省）に封じて中原の要衝を抑へつつ殷を監視させ、自らは都にひきかへした。（當時都は周原から現在の西安の西南約十哩の豊に移っていた。これは文王が最晩年に移ったものであり、文王は翌年薨じている。武王は克殷後、豊の北八哩、僅か東に位する。鎬に移った併せて豊鎬といふ。）武王は凱旋後二年にして崩じた。これは新興周邦に取つては一大試鍊であつた。一旦は平定されたにしても周より遙かに高度の文化を有し誇り高い殷の人人が「西夷」の統治にじつと満足している筈は無かつた。しかも自らの国を形造り自らの軍事力も有っている。一方周の方では未だ相統制度が確立していない。亡き武王の弟が相統権を主張することも当然考へられる。史記には

管蔡武庚等果して准夷を率いて叛く（魯周公世家）

とあり、孟子にも

周公、管叔をして殷を監せしむ、管叔、殷を以て畔く（公孫丑下）

とある。武王の弟の一人周公旦は幼い成王に代つて大叛乱を鎮圧するのであるが、周公は東方大討伐に出発するに先立つて周に協力する諸邦の君と周の高官とを前にして誥ことげている。

弔あはれまざるの天、災わざはひを我が家に降して少しも延べず……大いに西土に艱くるしみむあり、西土の人も亦静かならず（この二句は文王がのこした大宝龜に卜つた。）茲ここに於て蠢うごめたり……天、威を降す。我国疵し有り民康からざるを知りて、我復せんと曰ひ（武庚等が言つたこと）、反りて我が周邦を鄙あつにせんとす……艱大いに、民静かならざるも亦これ王の宮、邦君

の室に在り（大誥）

と今日の困難は周王室・王族自体の中にも問題があつたことを述べている。これはやがて周公による周の礼制の

確立にもつなげるものである。叛乱平定には二年餘りかかるが、かうした中であって、どうしてあの大殷が仆れなければならなかったのか、之に代る者は如何なる責任を負ふべきかなどに関して、周公旦の思想は深まってくる。

三

書五誥は殆どすべて周公の告げたものである（五誥は誥の名がつく大誥・康誥・酒誥・召誥・洛誥の五つの他に、同じ時期に告げられた梓材・多士・多方・立政・無逸なども含む）。五誥の中では、くりにかえし殷の先哲王の教へに従ひ殷の罰が重んぜらるべきことを述べている。書や詩には大邦殷（召誥・顧命）、大國殷（召誥）、天邑商（多士）、大商（大明）、大邦（大明）などと殷を偉大な国とするのに対して自国を我小國周（大誥）、我小國（多士）、と呼んでいる。この小國周が何故に大國殷を仆すことが出来たのか。古代にあっては祖霊が地上の一切を支配すると考へられていた。殷人は祭、告、享、出入、田獵、征伐、年（その年の）、風雨などに悉く祖霊の意志を貞うた。祖霊の加護なしには何事も為し得ないと考へた彼等は力を盡して祖霊を奉養してその加護を期待した。偉大なる祖は自ら偉大なる力を發揮する。三十代にわたる偉大なる祖に護られる殷は、僅か三代の祖しかない周よりも遥かに大きく強く守られている筈である。その強大な殷が何故に小國周に敗れ去ったのであるか。これに満足な解答を得ない限り、周公は心の落ちつきを得ないし、殷人に対しても自分等の行為の正当性を十分になっとくさせないことは出来ない。

殷では地上の一切は祖霊によって支配されていた。殷人は卜によって祖の意志を貞ひその加護を期待した。

貞ふ、人を岳に使せしめんか（殷契粹編三）

貞ふ、今日それ病を雨ふらすか (胡厚宣、殷人疾病考)

丙寅卜す、子郊……田す、それ羌を隻まざるか (鉄雲藏龜五九、一)

貞ふ、自(師)それ羌を隻まざるか (殷虛書契後編下、三七、一)

羌は殷の山地にいた部族で後にはずと奥に下がるが、この羌はさながら獻を狩るように狩獵の対象にされ、時には王師まで動員された。狩られたあげく五十、百、百五十、三百と犠牲に供せられた。「三百羌を丁に用ふ」といふ例が三つもある。羌の他、𠂔すや南も用いられたが羌が断然多い。

殷では人間は祖靈の影にしかすぎない。人間が完全に無視されていることは、墓室を造る際、土を翕ふき堅めながら、数十数百の人間が随時首を切られて投げこまれていることでも分る。戦前の発掘でも一九三五年春だけで千以上の頭骸が発掘され、秋にも亦千以上が発見されている (Creel: Birth of China) 伐という字は甲骨文では判つきり斧で首を切ることを示して居り、孫海波甲骨文編には百五十以上の例をあげている。カンサス市ロックヒルギャラリー所蔵、殷虚出土と推定される儀礼用斧の頭部の片面に伐の字が他の片面に獻けんが刻されている。<sup>(H)</sup>獻は祭器である。獻が刻され、伐の字が記されているこの斧はおそらく儀式として人間のくびを切る時に用いられたものであらう。人間が犠牲として用いられたばかりで無く、侍者・寵姫などが生きながらにして王と共に葬られた。これは殉死で犠牲とは自ら別であろう。戦後の発掘から一例をあげれば、安陽期初期のものと考へられる大墓が一九五〇年武官村から発掘された。<sup>(司母戊前出土の場所から八〇米の距離といふ)</sup>。填土の中に発見された頭骨は三十四箇、いづれも中央に向けて直立されてあった。二層台には西側に二十四人(女)、東側に十七人(男)の殉死者が並んで居りそれぞれ副葬品を伴っている。槨室底部の腰坑には銅戈を持った侍人が埋められている。北の墓道には四箇の殉葬



坑があり、その一つ、玄門に最も近いものには躡居した二人の門番が銅戈と鈴とをもって対座して坐つてをり、また玄門の両傍には四匹の犬もあつた。他の三つの坑には馬、計十六頭、南の墓道にも馬坑二、馬六頭、跪坐の人骨一などが見られた（郭沫若一九五〇年殷虛書契報告 考古學報一九五一年一五五）。これらの墓に見られる殷の文化は豪華ではあつても人間に対する敬は微塵も見られない。孟子によれば孔子は

始めて俑うちを作れる者は、その後無からんか、其の人に象なまりて之を用ふるが為なり

と言つたといふ。人に象なまつて用ふるのさへこのやうに非難した孔子の精神と殷のそれとの間には質的な轉換がある。孔子は周公を襲うつているに他ならない。孟子も「周公仲尼の道」と二人を並べている（滕文）。周公は殷を全

面的に学んだが同時に精神的な革命を果したのである。周に於て初めて人間が発見されたといへる。さて孔子ほどの博学が、むかしは現実に人が用いられていたことを知らなかったという事実は、殷が亡んでから孔子までの数百年間にさうした事実が全くなつていて、人人の記憶から犠牲の事実が完全に忘却されていたことを示す。

周では犠牲も殉死もはたと止んでいる。人間を犠牲とすることは周の精神と相容れない。（周の精神がおとろえた春秋時代に入ると極く稀に人間犠牲

があつたが、しかし激烈に非難されている。左傳僖公十九年。左傳僖公三十三年、成公三年、昭公五年などの記事では戦の俘を犠牲にすることがあるらしい記事があるが、三つの場合實際には行はれていない。昭公十年（B.C.五三三）には「俘を獻じ始めて人を豪社に用ふ」とあつて始めて人を用いたことが分るがこの時も非難されている。昭五三年、楚の威王が魯の太子を犠牲にした時「不祥なり……主必ず必ずを悔いん」と批評されている。殉死の例としては秦の穆公、武公などの時にその例があるが、献公にいたつて「從死を止む」とあるのは秦は西戎に位し、西戎の風が遺つていたものやがて中原の風に感化されてのことであらう）。

嘗て私は「卜辞の世界から人間的敬の世界へ」の結語として次のやうに書いた。

孔子は幾度が周公を慕つて歎じている。何時の時代にも周公の理想はくりかえし省みられた。青銅器などの面で驚くべき完成相を示した殷は、人間精神の面で尚きわめて一面的であつたが、周は殷文化を全面的に受け容れ、それを深化し内面化することによって、真に人間的な精神に到達した。それは為政者の道徳的理念とし

て驚くべき一つの完成相を示していた。

#### 四

祖霊は子孫から奉養されている限りひたすらに子孫を守る。一義的に子孫を守る祖霊だけの立場に立つ限り、未だ若い周が、歴史の古い多くの祖が守っている大殷をたほし得たことの説明は出来ない。祖を越えたもつと大きな絶対的なものの実在なくしては殷周革命の根據づけは不可能である。殷末期には既に個々の祖を越えた絶対者の出現が準備されていた。「祖の由つて出る所」と説明される「帝」がそれである。

帝、それ董（簠）を降らしむか  
（卜辞通纂三七二）

帝、佳（維）癸に其れ雨降らしむか  
（全 右 三六四）

帝、それ難を降らすか  
（殷虚書契考釈五二）

帝、雨を命じて年を正さしむるか  
（全 右 四六）

これらの帝は天と変らない。ただ帝は祖霊から二次的に認識されたもので、董作賓というやうに殷では祭祀の中心は祖霊であつて、帝は国家的祭祀の対象にはならなかつた。周では天は地上の生活と理想の根源であり、天の祭祀は周国家の最高のものであつた。大雅文王には

文王、上に在り、於、天に昭らかなり。……文王、陟降して、帝の左右に在り

とあつて、天と帝とは互用されているが、帝の方にはどこか、祖先神の延長としての面影が残っている。文王の霊は上に在つて護っている。帝も亦文王と並んでいるといふ。牧野で、殷の大軍を前にして武王は帝の佑助を確

信している。

殷商の旅、其の会、林の如く牧野に矢なる、維れ予、侯れ興さんとす、上帝、女に臨めり、爾の心を貳ふ無れ

(大雅大明)

これこそ武王の上帝に対するいつはらぬ気持であつたろう。上にある文王の霊も帝も必ず子孫を守ってくれるとの確信である。だが天はこのように一義的に守るものではない。絶対者天は冷厳である。天には私愛も私恩も無い。ただ天の意志にかなふ者のみを守りもし助けもするのである。祖霊がひたすら子孫を守るのに反し、天は一切の私を絶している。

武王没後の殷族の叛乱、それに加担した二人の兄弟、二年餘にわたる激しい戦、動乱平定後、殷の人人を励ましつつの新都の建設、弟庚叔封と長子伯禽とに殷の有力部族を分属させて、庚叔封を殷のみやこあとの地に、伯禽を殷の古い居住地魯とにそれぞれ封ずるなど、もろもろの苦心の経営の過程を通して、周公の心の中に天と天命との思想が確立して行つた。これによつて周公は自分等の行つた革命に初めてなつくことが出来た。又殷の人人に対しても自信をもつて信徒をすすめることが出来た。それに伴ふ責任と自覚とは例へやうも無く厳粛なものであつた。

## 五

叛乱平定に出発する際、周公が「爾多邦越び御事」(汝諸國の君と(周の役人達)に誥げたのが「大誥」である。その冒頭に今や、「弔まざるの天が、我が家に害を降して少しもゆう豫しない」、「天、威を降す」、「今、天戾を周邦に下す…天

命易<sup>やす</sup>からず」などと天の容赦なさをいふ他方、「天命が文王を休<sup>やす</sup>して我が小邦周を興した」とも「文王が受けた天命」とも述べている。天は界<sup>あか</sup>へもし休<sup>やす</sup>しもするが、恐るべき破滅を下しもする。その轉機をなすものが「徳」にあることを明確に言つてはいないが、その後の誥では明確にしている。天命も徳も周公によって初めて自覺された考であり、徳とは具体的に何を指すかも深く反省されている。周公は神明の前で大宣言（大誥）を発した後、中原に向ひ、二年餘にして叛乱を鎮定し武庚禄父と管叔とを殺し、蔡叔を追放（左傳）した後、再度殷のあとを宋に封じて殷の祀を継がせ、殷と周との中間洛の地に一大新都を建設することとして殷人を動員して之に当らせ自らは弟召公奭と共に指揮に當つた。新都完成するや、周公は幼い成王に位をかへし、「自らは退休して農事を明らかにしよう」（故に往き敷しめよや、茲に手を止むを明らかにせん——洛誥）としたが實際にはその後もずっと召公と共に成王を補佐した（召公、保と爲り、成王を輔けて左右と爲る其勲庸序）。「召誥」「洛誥」「君奭」等に上述の事情がよく表はれているが、「召誥」に見える召公の思想は周公と変りない。召公は周公と共に「海隅出日」まで兵を進めた仲であり（君奭、藩子）、時の二人に在りて天休<sup>いはい</sup>茲々至る」と周公は言つた。「無逸」は「嗚呼、君子其れ逸する無れ」で始つているやうに位についた成王に対して、君たるものの心構えを懇々と教へたものである。これらを通じて周公はくりかへし周が天から支持された所以と王たるものの責任の重大さとを語っている。新都は成周（accomplished Chou）と呼ばれ、住民は主として殷人であつたが、周公は殷人の心を周に近づけようと苦心している。成周が政事的主都としての役割を果たしたのに対して、旧都豊鎬は宗周（ancestral Chou）と呼ばれ、専ら宗教的主都としての機能を果たした。新都成つた後、周公は自分の長子伯禽を曲阜に封じ（魯）、弟康叔封を朝歌に封じ（衛）、それぞれに殷の有力な数部族をつを分屬させた。かくて殷民は宋と洛と魯と衛とに大きくまとめられ、周の意図を滲透させ、民心を一新（新民といふ事も）する

のに大いに役立った。殷人に取って紀元前十二世紀の頃、定住圏から遠く移されることは今日では想像も出来ぬほど困難な事であつたらう。周公はくりかへしくりかへしこれは周の恣意ではない、天の命に依つたのだと述べて、殷人のなっとくを求めている。周公の政治は単に理念を述べるに止ること無く、常に現実に出した具体的方法を伴っていた。政治は力であってもあくまで倫理的基盤の上にあつた。西欧の学者から 'ethico-political' な立場として高く評価され、十八世紀の啓蒙学者の間からは 'Ethocratic' なる新語さへ生れた。さて左傳定公四年には

…魯公に分つに…殷民の六族、條氏・徐氏・蕭氏・索氏・長勺氏・尾勺氏を以てし、その分族を輜め、其の類醜を將いしめて（「一統一族その家系類」）、以て周公に法則し、命に周に即く、是を以て之を魯に職事せしむ、…命ずるに伯禽を以てして而して小皞の虚（曲阜）に封ず。庚叔に分つに…殷民の七族、陶氏・施氏・繁氏・錡氏・樊氏・饒氏・終葵氏を以てし…命ずるに康誥を以てして而して殷の虚に封ず……

とある。康誥が宣せられたのは、周公攝政の七年、「惟れ三月哉生白（日）」、周公初めて基いし新大色を東国洛に作りし時、四方の民、大いに和會した節である。

孟侯、朕が弟小子封、惟れ乃の不顯なる考文王、克く徳を明らかにし爵を慎しみ、敢て嫠寡を侮らず、庸ふべきを庸ひ、祇しむべきを祇しみ、威そるべきを威れ（詩の畏天之威）、民に顯はる。用て肇めて我が区夏に造し、我が一二の邦に越び、以て修る。我が西土惟れ時れ特む、上帝に冒聞して帝休みす、天乃ち大いに文王に命じて戎殷を殪し、誕いに厥の命を受く、厥の邦と厥の民に越です。惟れ時れ敘す、乃の寡兄も勸む、肆がゆえに、女小子封、茲の東土に在り。

(二二)

周公は先づ周は徳の故に天命を受けたのであることを告げ、しきりに徳を説く。他の諸語にも

王、敬もて所を作せ、徳を敬せざるべからず

(召語)

肆に惟れ王、其れ疾く徳を敬せよ、王それ徳を之れ用ひて天の永命を祈れ

(召語)

惟れ其の徳を敬せざれば、乃ち早くその命を墜す

(召語)

などである。詩大雅蕩にも

天、烝民を生ず、其の命讎に匪ず、初め有らざる靡し、克く終りある鮮なし

とある。故に「上帝に昭事しては」、「小心翼翼」(大雅大明)である。この考方は人を必然的に内面的にする。康誥にはしきりに「念」(おもふこと)が説かれ「敬」が説かれる。「嗚呼封、汝念へよや」、「嗚呼小子封、乃の身に惻瘻して(疾病が汝の身に)敬しめよや」、「嗚呼封、敬しみて乃の罰を明らかにせよ」、「汝も亦、敬を克くせざることを閔れ」、「嗚呼封、敬しめよや」、「往けよや封、敬を替つること勿れ」などと言ひ、「汝に、徳の行と罰の行とを告げん」と告げる。「徳言に衣る」、「朕が心朕が徳」、「先哲王の徳」、「敏徳に則る」、「乃の徳を顧み」などとしきりに徳を説く。

徳に若ひ、乃の身を裕にすれば、王命に在るを廃せられず

と述べる徳は、「用つて民を康父す」「用つて民を保父す」「用つて民を康保する」(に治める)ことに他ならない。周公は、康叔封に、心をつくし、はかりごとをつくし、誠をつくして、民の平安を保つべきことをすすめている。

嗚呼封、敬しめよや、怨を作すこと無れ、非謀非彝を用ふること勿れ、蔽むるは時れ枕にせよ、丕いに敏徳に則り、用つて乃の心を康んじ、乃の徳を顧み、乃の猷を遠くし、裕かに乃ち民を以て寧ければ、汝を瑕殄

せず

嗚呼、封、敗、しめよや、徳を買ふやうなことをしてはならない。道に非ざる謀、常道にそむいたことをしてはならない。きたむる（批判）のにはまごころからせよ、大いに敏徳（速やか）に善に移った古人の徳に則り、汝の心を安らかにし、汝の徳を反省し、汝の謀を遠くせよ、汝を寛容せまらぬ徳をもち、民をひきゐて相安んずれば、汝を徳（徳）と敬み、大徳ありとして威したりはしない。

天畏忱に棐す、民情大に見る可し、小人保んじ難し、往いて乃の心を尽し、康んじて逸豫を好むこと無れ、乃それ民を父めん

天のおそろしきは一定せずに分りにくい、民の心は大に見ることが出来る。民は安んじ難いものである、汝は任地におもひて汝の心を傾け、安心して逸豫（いよ）によけたりしなければ汝は民を安んずるに出来るであろう。

その民は土地と共に、天から託されているのである。

天乃ち大いに文王に命じて戎殷を殪し、文王誕いに厥の命を受く、厥の邦と厥の民に越いてす、惟れ時れ敘す。天から託された民を手厚く導くのが王者の責務である。酒誥・梓材も康誥と同じ時のものとされる（書序）が、それにも

皇天、既に中国の民と厥の疆土とを先王に付す。王、惟れ徳用つて迷民を和懌先後、用つて先王の受命を懌てべ（皇天が中国の民とその土地とを先王に付託した。（王は今天命を受け、先王がしたやうに、王の徳を）もちて迷民を和らげることばせ、これを導くことによつて、先王の受けたのと同じ天命をよろこべ。）

「王、監を啓く、その乱むる、民の爲にす」（梓材）、「惟れ天、命を降す、我が民に肇まる」（酒誥）とある。洛誥には、「受命の民」「受民」といふ言葉が見える。康誥には、「天命を度り、新民を作せ」ともある。民はつねに天と並べられている。「予、惟れ天と民とに闕ふ」、「我れ亦敢て上帝の命に寧んじて、永遠に天と我が民とを念はずんばあらず」（君奭）。

成王が幼いとはいへ、元首であるのは、下下の民を能く和らげているからだとして（召誥）

嗚呼、有王小なりと雖も元子なる哉、其れ不いに能く小民を誠げて今休し、王敢て後れざれ、用て民の聶を顧

畏せよ

といふ。天のおそろしさが、民のおそろしさに置きかへられて、天畏の畏の字が、「民の畏（けわしき）を顧畏」せよと同じく畏が用いられている。多士には、「民のとり行ふ所が、とりも直さず、天の明威」だとなり、康誥には、「天畏はとらへ難いが民情は大いに見ることが出来る」とある。「惟れ我が下民の秉爲、惟れ天の明威」<sup>（四）</sup>（多士）、「天畏、忱に秉ず、民情大に見るべし」<sup>（五）</sup>（康誥）とある。民を離れて天命は考へられない。

王、小民を以て天の永命を受けんことを欲す<sup>\*</sup>（召誥）

王が天の永命を受けるのは、民を導くことにかかっている。「小民を以て」とは、「徳を以て導く」ことに他ならはいいのは同じ篇に、

王、其れ徳を之れ用いて天の永命を祈れ<sup>\*\*</sup>

とあつて「小民を以て」が「徳と之れ用いて」に置き換へられていることでも明らかである。王者の徳とは民を休美ならしむることと別ではない。それが天命を受ける所以である。

王、それ成命ある。民を治めて今休し<sup>（召誥）</sup>。

（\*欲王以小民受天永命 \*\*王其徳之用祈天永命）

## 六

「酒誥」は酒の故に亡んだとされる殷の地に封ぜられる愛弟康叔封に、政治の要諦を語る「康誥」と前後して、誥げたもので、酒についての戒めともいへる。



…酒は祭祀にだけ用いるべきである。…天が威を降し、我が民が大いに乱れ、徳を喪ふのも亦酒で行ったのではないものは無い、小大の邦が喪んだのも亦酒の辜でないのは無い、文王は、若者や長官や官吏たちに酒は常用すべきでないと戒めた。どこの邦に於ても飲むのはただ祭祀の時であり、その場合も、徳を以て泥酔に至るなとした……妹土（豊地の故地）の人人が、その四肢をつかつて専らきびやあわを植え、奔走してその父兄に事へ、初めて車や牛をひいて遠く交易し以てその父母に孝養をつくし、父母がよろこんだ時は、自ら杯を洗ひ料理を多くして酒を用いてもよろしい……我が西土のわが先考（文王）を助けて來た邦君や官吏、若者達は、尚今も克く文王の教へを守つて酒にふけていない、だから我は今に至るまで殷命を受けているのだ。

私は次のやうなことを聞いた、在昔、殷の先哲王は、天の顯れである小民を畏れ（天顯小民）ることにあつた。彼等は徳を経ない、哲（深い）の深い智を把持した、成湯（殷の祖）からことごとく帝乙に至るまで王の威嚴を成していた、相けるのは御事たちであり、御事たちは秉（つと）けて恭であつて、暇に身を任せ安逸にふける様なことはなかつた、まして聚つ飲もうなどと言ひはしなかつた、遠くの領地（外服）では、侯・甸・男・衛・伯などの長が、又王直屬の土地（内服）では、もろもろの官吏、もろもろの次長、仕事の当事者達、又貴族の田舎に住んでいる者達も、誰も酒にふけることをしなかつた、しないばかりでなく、そんな暇もなかつた。というのは、彼等は皆、王の徳を完成して顯はすことと、人をおさめ法を敬することを助けていたからである、私は次の様に言うのをも聞いた、今の、後で位を継いだ王は、酒に身をただらせ、命令の中で民の尊敬すべきことを明らかにせず（厥命罔顯于民祗）民から怨まれつづけながらその態度を改めることをしなかつた、彼の放縱はひどく、なすべからざることにとめどなくふけり、楽しみによって王の威儀を喪失してしまい、民も心を傷まぬ者は無

かった、王は全く酒に荒廃しふけたのである、自ら息めることを思はず、ただ安逸を続け、その心は荒れ戻っていた、彼は死を畏れることが出来なかったのだ、寧ろ商の都にありながら、殷国が滅ぶのを憂へもしなかった、徳のかんばしい香りが上天に登り聞えることを思はず、民は大いに怨み、群臣は酒にふけていた、かくて酒のなまぐさいにはひは上天に上り、その故に天は滅亡を殷に下して、殷を愛しまなかった、これは安逸の結果である、天が虐げたのではない、人が自ら寧ろを招いたのである、封よ、自分はあまり多く誥げようとはしない、だが昔の人が言っている、人は水に監みるべきではない、当に民に監みるべきである。

「多士」は周公初めて新邑洛において商の王士に告げたものであり、鄭玄は「成王元年三月」のこととする。

汝、殷の遺れる多士たちよ、弔まざる旻天、大いに喪ぶることを殷に降した、我が有周は天命に佑けられて天の明威を行い、王の罰を行なって、殷の命を勅し、上帝の志を完成した、肆に、汝殷の多士たちよ、我が小国周が敢て殷の命を取ったのではない、天が殷に与えなくなったのである、天が我を弼けたのである、どうして自分から敢て天位を求めたりしようか。

周公は周が殷に代ったのは、周の恣意によるものではないことを述べた後、その昔殷が夏を仆した時も同じく天の意志であったという。

夏の君が安逸を正さなかった時、上帝は降格（降たり）して夏に近づいたが、夏は上帝に意を用いず、大いに淫佚して悪名が高くなった、そこで天は夏のことを顧慮もせず聴きもしなくなった、かくて大いなる命を廢して罰を降し致した（推廢元命、降致罰）、そこで汝の祖成湯が夏を追放し（放め）、すぐれた人々を用いて四方を治めたのである。

と言ったあと、「成湯から帝乙に到るまで徳を明らかにし」よく先祖を祭ったが最後の王に到って「誕いに淫しそれ決して、天<sup>てん</sup>顓<sup>そん</sup>民<sup>みん</sup>祗<sup>し</sup>を顧<sup>かん</sup>る」なかった」ので「天帝が保護しなくなり、此くの如きの破滅を降したのである」という。

惟<sup>ただ</sup>れ天<sup>てん</sup>の昇<sup>あが</sup>へざりしは、厥<sup>その</sup>の徳を明らかにせざればなり、凡そ四方小大の邦の喪<sup>むす</sup>びしは、罰に辞有るに非るは罔<sup>な</sup>し

として殷の滅亡は如何ともし難かったことを告げている。周公は続ける。

汝等多くの殷の官吏（多士）よ、今や我が周王は大いに見事に天帝のことを引き受けた、天命があつて殷を滅せと言った、今や勅<sup>たふ</sup>した事柄を天帝に報告した、天下、我がことに二心あつたり敵するものは無い、（しかるに）爾の王家（<sup>武庚</sup>）は我に敵した、我は敢て曰う、大いに無法であつたのは汝等である、私の方から汝ら移動させたのではない、（<sup>移動させた</sup>）汝の中に在つたのである、私は又思う、天が既に大きな暴戾を殷に下しているから私としてはこれ以上は罪を正さない、：ああ汝等殷の多士に告げる、私が汝等の居を西に移したのは、為政者としての私一人が不当のことをしたのではない、これは天命である、私に違ふことがあつてはならない：私を怨んではならない、

最后を周公は次のように結んでいる。

殷の多士たちに告げる、今や私は汝達を殺さなかつた、私はただ命令を重ねて述べるだけである、今や私は大都市をこの洛の地に造つた、私は四海の裡誰をも拒否しない：汝等願はくば汝の土地を有し、汝の仕事と住居に平和であつてくれ、汝がよく敬虔であるならば天は汝に加担し汝を憐れむであらう、もし汝が敬を克くし

なければ、汝はただに汝の土を有たないばかりでなく、我も亦天の罰を汝の上に降すであろう、（爾不<sub>レ</sub>克<sub>レ</sub>敬、爾不<sub>レ</sub>善<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>爾土、予亦致<sub>二</sub>天之罰于爾躬<sub>一</sub>）今や汝等、汝等の邑<sub>も</sub>に住み、汝等の居を永くつづけるならば汝等は仕事を与えられるであろう、そしてこの洛に年あるならば、汝等の子孫が栄えることはここに移ったことから始まるであろう。

「多方」は周公が成王に政をかえした翌年の五月、宗周に於いて諸国の指導者（<sub>邦と同じ</sub>多方の方は）を集めて殷周革命の由つて来る所以を述べたものであるが、その中でも周公は殷の前の夏のことから説き起している、天命は夏に降ったが、やがて夏は大いに逸し、大いに淫昏し、王者としての責に耐えなくなり、民の心を守れなくなった、かくて天は大いに罰を下したといひ、

天惟<sub>レ</sub>時<sub>ニ</sub>民<sub>一</sub>の主を求め、乃ち大いに顕<sub>ニ</sub>休<sub>一</sub>なる命を成湯に降し、有夏を刑殄す

という。成湯から帝乙に至るまで殷の指導者はよく勤め、「明德慎罰」につとめよく天の命を受けていたと語った後、

汝の最後の商の王は安逸にふけり、政<sub>まつごと</sub>に身を入れず祖先への捧げ物もしなかった、天はそこでこの破滅を下した……、天は彼の子孫が大いに民の王となる為に五年の間待ったが利き目が無かった、そこで天は汝等多くの国々（多方）を求め、大いに威を以て天をおそれる人間をさがした、然し汝等多方の中にこれに堪える者は誰もいなかった、ただわが周王のみが多くの人々から支持され（靈承<sub>ニ</sub>于旅<sub>一</sub>）よく徳を用いるのに堪え、神天への義務を果たした、かくて天は我を教え我を手あつくし、大いにえらんで殷の命を我に与え、爾等四方の君としたのである、汝はどうして我が周王に近づき助けて天命を受けないのか、今汝は尚自らの家に住み自らの田

を耕すことが出来る、汝はどうして王に順い天の命を広めないのか、汝は導かれること屢であるけれど尚未だ平静ではない、汝の心は未だ（周の国を）愛慕していない、汝は未だ大いに天の命を測っていないのだ、汝はまちがって天の命を棄てているのだ、これは汝自ら不正を為し、正道に誠でないことなのだ。

このように告げた周公は、自分が汝に降した命を用いないならば、自分は汝を大いに罰し殺すであらう、かくするのは汝自ら辜を速いたのである、と言う。

乃我が爾に降す命を用いざることあれば、我は乃ち大いに之を罰殛せん、我が有周徳を秉りて康寧ならざるに非ず、乃ち惟れ爾自ら辜を速くなり。

周公は結びの言葉として次のようにいう。

汝がもし安逸にしてねじけて居り、大いに王の命から遠いならば、その時は諸方の国々をして天の威を汝の上に示し、自分が天の罰を汝に降し、汝を汝の土から遙かに遠く移すであらう。

七

夏や殷が亡んだのは徳を敬さなかったからである（惟不敬徳、乃早墜其命）、天が虐たげたのではない、自ら辜を速いたので、天が昇へなくなったのは、その徳を明らかにしなかったからである（惟天不畀、不明厥徳）などと天は徳有れば助け、徳を失へば容赦しない。天は威を降し（大誥）、滅威する（君奭）。罰を降し（多士）弔れまず大いに喪ぶることを降す（多士）、天命易からず（君奭）、天命謹とし難し（君奭）、天信ずべからず（君奭）とはかかる天の威（多士）天の明畏（大誥）に対する周公の実感であった。詩にも、天命常靡し（大雅文王）、

其の命まことに匪あらず（大雅蕩）とあり、大學には、峻命きん易やすからずとある。天は他面、与へ矜あはれみ（多士）、わが大いなる基を弼たすけ（大誥）もする。この故に王たる者は、朝に夕におそれつつしまなくてはならない。「無逸」は新に位に即いた成王に対する周公の訓戒とされるが、その中で殷の中宗、祖甲などがいかによく勤めて天から支持されたかを語っている。

…周公曰く、嗚呼、我聞く曰く、昔殷王中宗に在っては、嚴恭寅畏（眞は敬、畏は慎）、天命自ら度り、民を治めて祗つつしみ懼れ、敢て荒寧せず、肆かたがたに中宗の國を享かうくこと七十五年なりき、其れ高宗（武丁）に在っては、時旧ときふるしく受うに小人と暨ともにす、作たつて其れ位に即つくも、乃ち或は亮陰三年（少之謂じて武丁、亮三年の礼に立つ）言はず、其れ惟言はず、言へば乃ち雍おさらぎ、敢て荒寧せず、殷邦を嘉靖して、小大に至るまで、時に怨み或るなし、肆に高宗の國を享かうくこと五十有九年なりき、其れ祖甲に在っては、惟れ王たるを義とせず（兄があつた）、旧しく小人と爲る、作たつて位に即つくや、愛いとに小人の依よを知り、能く庶民を保恵して敢て鰥寡を侮あなどらず、肆に祖甲の國を享かうくこと三十有三年なりき。

續けて周公は、「これより後、立てる王は」、生きてゐる間中、安逸して、農作の艱難を知らず、小人の苦勞も聞かず、ただ耽樂にのみふけていた、これから後は、亦よく長生きした王も無く、或は十年、或は七八年、或は五六年、或は三四年であつた、と誥げた後次のやうにいふ。

周公曰く、厥それ亦惟もれ我が周の大王・王季よく自ら抑畏よく抑へてす（文王卑服（服はこと、卑服は）康功田功（實度の功）に即つく、微よくく柔懿よくく恭、小民を懷保して、鰥寡を恵鮮（鮮は賜）す（鮮は賜））。

周公は更につづける。文王は朝早くから、日が中天し、更に傾くに到るまでゆつくり食事する暇すら無かつた。

斯くて彼はことごとく万民を和らげた、文王は遊樂も田獵もせず、庶邦の先頭に立つて政をつつしんだ（共二恭）

文王が天命を受けたのは中年であったが、彼が國を享けたのは五十年にも及んだ、と。無逸篇の名は冒頭の「周公曰、嗚呼君子所其無逸」から来る、無逸とは「to have no pleasurable ease」(Karlgren) 'to have no luxurious ease' (Legge) などと訳されているが、篇中「稼穡の艱難を知り」「小人の依（二）（痛若）（三）」を知る」（二回）べ、と、「よく柔、よく恭、小民を愛しみ守り、よく孤独の者をあわれむ」べきことを言ふ。「嗚呼、殷王中宗及び高宗及び祖甲より、我が周の文王に及ぶまで茲の四人哲を迪む」として哲をふみ徳を行った四人を等しく並べている。徳の立場に立てば部族の区別は無い。ここでは周公は部族の差別も祖靈の支配も完全に超脱している。「惟れ聖も念（二）ふなくば狂となり、惟れ狂も克く念へば聖となる」（多方）で、聖と狂との区別は念ふか否かにかかっている。天から支持されるのは念であり、敬であり、徳である。そしてこれらはすべて民に関はっている。

文王、誕いにその命を受く、その邦とその民に越（二）す（康誥）

皇天既に中国の民とその疆土とを先王に付す（梓材）

予（二）これもつて天と民とに関（三）ふ（君奭）

これ我が下民の秉（二）爲、これ天の明畏（多士）

民は天のあらはれなのである。さきの「天（二）頭（三）小民」なる句は重大である。「むかし殷の先哲王は天の頭（二）れである、小民を畏れ、徳を経（三）なひ、哲を把持した」（酒誥）「後で位を継いだ王は、酒に身をただらせ、命令の中で天の示した民の尊敬すべきことを明らかにせず……」（厥命（二）罔（三）顯于民。祇（四）酒誥）とある。「多士」には「天（二）頭（三）民（四）祇」なる句がある。民を敬すべきことは天の啓示なのである。（二五）

誕いに淫し厥れ決して、天、顯の民祇を顧るなし、惟れこれ上帝保せず、茲ごときの大喪を降す

臣は天の顯れであり、敬せられなければならない。しかも「民はあやまつものである」(爽つは惟れ民、「その民を善と平安とに導け」(吉康に迪びけ)、「民は導けば行かない者はない、導かなければ政が國にあるとはいへない」「民を視ること疾あるが如くするならば、民はことごとく咎を棄てるであろう、民を遇すること赤子を保つが如くするならば、民は安らかに治るであろう」(康誥)。「王は、小民を以て、天の永命を受けよ」、「王は、それ徳を之れ用いて天の永命を新れ」(召誥)。天の永命を受けるのは徳によってであり、徳とは民を導くことに他ならない。現実の導くことには刑罰も不可欠であるがそれも、「汝封が妄りに人を刑し人を殺すことがあつてはならない」(康誥)。

王は曰つた、外朝の裁判については、法の項目を明示して殷の罰が法則をもっていたのを手本とせよ、王は又曰つた、罪人の罪を定めるのには五六日から十日に至り、更に三月に至ってから大いに罪を断ぜよ、王は曰つた、汝はこの法の事を陳べ、刊罪や断獄は殷の法則を用いよ、刑すべき刑、殺すべき殺を用い、用いるのに汝封の氣持によつてはならない。尽く順つて時れ敘す(万事うまくいっている)といふ時でも、ただ未だ行っていないといへ

(康誥)。

紀元前千二百年にこの様な政治理念が確立していたのに驚くと共に、近数十年、何百万といふ人が罪なくして捕へられ、故なくして殺され、獄中非道な扱ひを受けたことを考へると感無きを得ない。フランス人パスカーニ(後にドゴールの中  
國語通訳をした)

の七年に及ぶ獄中生活の記録「毛澤東の囚人」は正に中国版「収容所列島」で非道の極を描いている。北京を愛して北京に今も残っている「北京三十五年」(岩波新書)の著者山本市朗も理由も分らぬまま捕へられた一人で待遇は非道と



はいへなかったにしても五年半の間人っ子一人を見もせず人っ子一人と話しもせず驚くべき完全な隔離であった。旅行中突如姿を消し四年も五年も消息すら分らなかった日本人も少くなかった。思ひつきや恣意によって人民は駆り立てられ、下放され、右に左に走らされ、幹部は権力闘争に明け暮れ、役人は無責任・無気力・民衆に対しては官僚主義、その結果大衆は絶望と荒廃に陥り入った。青少年の道德的頹廢もこれらに根本があったが、此の頃では一部で青少年に古典も必要だと考へられているといふ。古典が必要なのは先づ指導者であらう。

政治とは何か、政治の原点はどこにあるのかを、改めて念ひ、人を敬念し、天と民とに關へることの痛切さが、今日ほど要求されることはない。

## 八

周公によれば、民を敬すべきことこそ天の啓示である。「永遠に天威と我が民とを念はずんばあらず」、「克く上下に恭（君爽）である。上とは天、下とは民である。よく天にも民にも恭とは、「天頭の小民を迪畏す」（酒誥）と一つである。

天の視るは我が民の視るよりし、天の聴くは我が民の聴くよりす。（孟子引、書の佚文）

の考も軌を一つにする。五誥ではないが、その頃の製作に近いと考へられる書、皐陶謨に見えるのも同一である。天の聰明は民の聰明よりし、天の明畏は我が民の明威よりす。

左傳や管子に見える「民の欲する所、天必ず之に従ふ」、「王者、民を以て天と寫す」などはこの延長線上にある。酒誥には、

人、水に監ることなかれ、当に民に監るべし

とあるが、人とはいつも治者、民とは小民・下民をさしていた。「民は爽さわつ」ものであるが、それを「迪よく」のが治者の責務であり、「民は迪けば適あたかないものはない」(康誥)。周公は先づ民を発見し、治者(人)の責任を自覚した。殷人には人間は眼中になかったが周公は「天顯小民」としての民を発見した。民は敬せらるべきものとなった。孔子は治者にも下民にも共通する人間の本質としての仁を自覚した。これは普遍的人間の発見ともいへる。孔子は、「天蒸民を生ず、物あれば則あり、民の夷いを秉もる、この懿徳を好む」といふ大雅蒸民の詩を引いて此の詩を為なる者はそれ道を知るか、といったといふ(季上)。「あやまつ者」である人間が「懿徳を好む」のは人は誰でも深い所では浅い自分を越えた本質をもっているからである。「天顯小民」「天顯民祗」の所以である。その民を天に代つて導くのが天子である。その自覚は「盤庚篇」製作の時代に最も深い響きをかき鳴らしている。

邦の臧よきは惟れ汝衆、邦の臧よからざるは惟れ予一人佚罰あり(邦が善く行っているのは故衆人の功であり、も)  
(し邦がよく行かない時は予一人の責任である)

論語にも書の佚文が引かれている。

朕が躬罪あらば万邦を以てする無けん、万邦罪あらば、朕が躬にあらん(我が身に罪があつたら、四方の人民に及すことのないやうに。又天下の人民に罪があるならばその原因は私にある)

驚くべき内面的反省である。その政治理念は‘ethico-political’と呼ばれたやうに人間尊重が治者の道徳的責任感によつて支えられている。司馬遷は殷の政は敬、周の政は文(高祖本)といったが、周の政は正に文である。ここでは天と道徳と政治とが不可分に融攝している。唐君毅の言葉を借りれば、それは印度流の超人文でも、近代科学の非人文でも、黒子の次人文(エッセ)でも、法家の反人文でもない。まさに「人文」といはるべきである。

「天顯小民」「天顯民祗」の政治は真の人文の上にのみあり得る。功利主義や唯物論或は法万能主義、はてはイラ

ン流の敬一偏倒にも真に人間の爲の政治はあり得ない。政治はもう一度真の人文にかへる以外にない。周公・孔子の流を汲む孟子も荀子も等しく次のやうに言っている。

一不辜を殺して天下を得るも、皆爲さざるなり

一人の罪のないものを殺せば天下を得ることが出来てもそんなことはしない。これこそ政治の原点であるべきであらう。  
(昭和五〇、九、一三)

## 註

一、Li Chi : Beginnings of Chinese Civilization, Pl. X, P23—24及び大陸雜誌八卷十二号

二、董作賓、大陸雜誌八卷十二号

三、H. Creel : Birth of China, p. 105

四、貝塚茂樹「新資料を通じて見たる殷王朝文化」「殷末周初の東方経営について」。陳夢家、殷虚卜辞録述押図十殷末征人方地圖。

五、后稷を周の祖とするのは周が天下統一後あとから加はったものであらう（岡崎文夫、中国古代史要等）。

六、S. Yamamuro : Notes towards appreciation of the 'Great announcement'（九州大学文学部欧文紀要、哲学）

七、これらの類別は殷虚書契考釈によった。

八、白川静、羌族考（甲骨金文学叢九）。李学勤殷地理簡編。

九、小著「儒教と老荘—中国古代における人文と超人文」図版1にその幾分かを寫真にして置いた。

一〇、斧の高九インチ3／8幅七インチ1／4 B. M. F. A. no. 29及び Creel : Birth of China に寫真がある。小著

図版Ⅲ AⅢ B。

一一、大陸雜誌第三卷第十二期

一二、康誥については小論「康誥解」（九州大学文学部四十周年記念論文集）と参照されれば幸である。

一三、（訳）嗚呼、王は幼なくとも天の元子である。王は小民を和らげて今休美である。王よ、小民を顧念するのにおく  
れてはならぬ、民のけわしさを畏れよ。

一四、カールグレンの訳、What our lower people held on to and did, that was (the expression of)

Heaven's discernment and severity. 明威を二つに分っているのには感心しない。明威は一つであり、あざむくこと  
の出来ない威である。その威が内面的に感ぜられる時、明畏と畏の字になる。

一五、天顓民祗を天顓と民祗との二つに分けることも出来る。Legge の訳は「he paid no regard to the bright  
principles of Heaven, nor the awfulness of the people」としているが、私は「天顓小民」とともに「天顓の民祗」  
とする。